

特別寄稿

フィールド研究会@名古屋 所感

今尾 真弓

(名古屋大学 医学部保健学科)

本稿で私に与えられたテーマは、「名古屋という地においてフィールド研究・質的研究を語り合う価値」である。名古屋は、学部・大学院時代を過ごした地であることから、私にとっての研究生生活の場であったということができる。このような立場から、この地2回にわたって行われた研究会を振り返り、私が感じたことを書いてみたい。

2回の研究会のテーマは「フィールド研究(第1回)」、「質的研究と科学(第2回)」と、いずれも心理学界で大きな話題となっている内容についてのものであった。いずれの場においても高度な議論が行われ、論点となった事柄のひとつひとつに重みがあり、議論の時間が足りないほどであった(第1回研究会の詳細については「てんむすフォーラム1号」を参照されたい)。

2回の研究会を通じて最も強く感じたのは、名古屋においてもこのような研究会が行われるようになったのかという、感慨に近い気持ちであった。というのも、私のこれまでの研究生生活を通して、名古屋という地にはフィールド研究・質的研究との間に、ある種の“なじみにくさ”があるのではないかと常々感じてきたからである。私が修士論文を書いた当時に思い起こせば、周囲は当然のように統計的・量的な研究方法を選択しており、面接法という質的なアプローチを用いるだけでプレッシャーを感じるほどであった。そのプレッシャーを押し返すパワーを、質的研究についての文献を読むことによって、また数少ない仲間と語り合うことによって得ながら、なんとか論文を書き上げた記憶がある。当時はまだ(質的研究と対比される)量的な研究が主流であった、という时期的な要因もあったが、やはり名古屋という地ゆえの要因も大きかったように思う。

その一つは、オーソドックスなものへの志向性である。新手のものに対する慎重さ、とも表現できようか。この志向性が、発展途上であり、ある意味で“冒険的”ともいえるフ

フィールド研究・質的研究よりは、よりスタンダードな量的・統計的研究を無難に選択する、という形となって現れるように思う。フィールド研究・質的研究への関心があったとしても、実行に移すのが難しい、というのがこの地の特徴といえるかもしれない。このため私には、フィールド研究・質的研究について議論される場合は他地域での研究会や学会の全国大会でやっと出会えるもの、という感覚すらあった。

“なじみにくさ”を形成するもう一つの要因は、この地における“自分自身を出す・表現すること”の難しさであるように思う。「自分(地)を見せないスマートさ」に価値が置かれるがゆえの難しさ、とも言えようか。フィールド研究・質的研究においては、研究者自身のものの見方や世界観、人間観といったものが深く関与するため、研究者自身と研究とを切り離して考えることはできない。研究を行っていく上では、研究者自身の「自己」をある程度呈示していくことが重要な作業となる。しかし、自己を呈示することそのものに大きなエネルギーを要する名古屋においては、これが困難な作業となり、フィールド研究や質的研究を行っていく上での大きな壁となっているように思うのである。

このように自己呈示の難しい地において、「研究者としての自己」というトピックが議論されたことは意義深かったと思う。第1回研究会においては「研究者である自分をいつ・どのような形で出していくか」という重要な問題が議論された。この中で3人の登壇者それぞれにおける「研究者としての自分」が呈示され、具体化・明確化されていくという作業がライブで行われていったが、私にとっては名古屋らしからぬ光景を眺めているような、不思議で強い印象を残すものであった。最も大きな価値があったのは、この地において「研究者としての自己呈示」のあり方には、正解、あるいは正しいやり方はないということが具体的に示され、議論されたことであると思う。フロアにいたこの地の聴き手の中に、何らかの形で「研究者としての自分」「スタンス」といった問題に向き合い、「これで良いのだろうか」という心もとなさを抱えている人がいたとすれば、その心もとなさを抱えつつ前に進む力を、あの場での議論から受け取ったのではないだろうか。

以上、私個人がこの地において感じ続けてきた、フィールド研究・質的研究との“なじみにくさ”を中心に、思いつくままに述べてみた。このような“なじみにくさ”が今後、フィールド研究・質的研究の“根付きにくさ”へと繋がらぬよう、そしてこの地がその“なじみにくさ”を超えて「語り合う場」となることを願いつつ....。